

令和2年度東アジアプロジェクト研究報告

○プロジェクト名

東アジアにおける文化伝承の研究

○研究組織

研究代表者：富平美波、高橋征仁

研究分担者：田中晋作、馬彪、森野正弘、小林宏至、更科慎一、谷部真吾

研究協力者：なし

○研究の概要と結果

プロジェクトメンバーの研究分野・特性を活かし、主に日中両国の古代から近現代にわたる幅広い研究テーマに取り組んだ。具体的には、百舌鳥・古市古墳群から見た日本列島における古代国家形成過程、中国古代の国家体制、日本の楽書『教訓抄』の全注釈作成へ向けての基盤的研究、中国各時期における言語接触の状況や中国明清時代の音韻の研究などに始まり、日本近現代における祭の変化と時代状況・社会状況との関連、現代中国社会における民俗知識とメディアをめぐる研究、新型コロナウイルス感染症と地震、豪雨、原発など異なる脅威に対するリスク感度の差異についての計量的研究などを行った。

○研究成果の一覧

(1) 学会誌等（発表者名、テーマ名、学会誌名、巻号、年月日、ページ）

富平美波「『續通志』「七音略」の「門法解」について」『山口大学文学会誌』第71巻、2021年3月、75-98ページ

Goodwin, R., Sugiyama, K., Sun, S., Takahashi, T., & Aida, J. Trajectories of distress following the Great East Japan Earthquake: a multi-wave prospective study. *Clinical Psychological Science* vol 8, no 6. 2020年9月15日、1062-1068ページ

田中晋作「古墳時代中期における対外交渉一元化への動き」『柳本照男さん古稀記念論集—忘年之交の考古学—』柳本照男さん古稀記念論集刊行会、2020年12月26日、97-110ページ

田中晋作「古代山口と史跡周防鑄銭司跡—問題提起にかえて—」『古代テクノポリス山口—その解明と地域資産創出を目指して— 研究報告書』山口大学山口学研究センター・山口大学人文学部、2021年3月31日、49-70ページ

田中晋作・今岡照喜・森福洋二「史跡周防鑄銭司跡出土の鉛製錘」『古代テクノポリス山口—その解明と地域資産創出を目指して— 研究報告書』山口大学山口学研究センター・山口大学人文学部、2021年3月31日、153-170ページ

Chemla Karine; Biao Ma (馬彪) : The Use of Volume in the Measurement of Grain in Early Imperial China Mathematics, Administrative and Economic Activities in Ancient Worlds Springer Natureシュプリンガー・ネイチャー出版社 2020年 239-279ページ

馬彪「青木流名物学の真価」The true value of Aoki style's "Meibutugaku (Exegetics)" 『異文化

研究』第15号（山口大学人文学部異文化交流研究施設）2021年3月31日、32-45ページ
森野正弘「時間に遅れる職御曹司」『日本文学』No813、日本文学協会、2021年3月10日、58-61ページ
更科慎一「ウイグル語学習書としての『高昌館来文』の性質について」『異文化研究』第15号（山口大学人文学部異文化交流研究施設）、2021年3月31日

(2) 口頭発表（発表者名、テーマ名、学会等名、年月日）

馬彪 講演「青木流名物学の真価」山口中国学会大会 2020年12月19日（土）午後
小林宏至「開催校企画「華僑華人メシ」趣旨説明および廈門のソウルフードとしての沙茶面」(日本)
小林宏至「茂山口県萩市見島における鬼揚子の色彩表現をめぐって」(日本)
小林宏至「文化人類学からみた風水研究史」(日本)
高橋征仁「当事者アンケートの意義と見えてきた課題」3・11甲状腺がん子ども基金オンライン・シンポジウム「いま、当事者の声をきく」2021年3月20日
高橋征仁「原発事故からの10年を振り返って」被災者・避難者・支援者と地域の交流フォーラム in山口、広島避難者の会アスチカ（パルトピア山口）、2021年3月21日

(3) 出版物（著者名、書名、出版物名、年月日、ページ）

小林宏至「『伝統文化』をめぐるメディア 人類学のフィールド 中国客家社会における福建土楼を事例として」藤野陽平、奈良雅史、近藤 祉秋編『モノとメディアの人類学』ナカニシヤ出版、2021年3月、77-94ページ

○プロジェクト名

アジアの教育と文化におけるグローバル化

○研究組織

研究代表者：有元光彦

研究分担者：石井由理、葛崎偉、北沢千里、熊井将太、佐々木司、鷹岡亮、高橋俊章、中田充、松岡勝彦、森下徹、山本冴里

研究協力者：なし

○研究の概要と結果

本プロジェクトでは、グローバル化が進むなかでのアジア各地域の文化の固有な局面を取り上げた言語学や歴史学の研究を進めた。また理科教育、美術教育、外国語教育や学級経営、あるいはカリキュラムの検討など、教育に関する多面的な研究も行ってきた。2020年度の成果のうち主要なものは別記のとおりである。学会誌、学会発表、出版物などで多岐に渉る業績をあげており、成果目標値の達成は100%と判断できる。英文の成果も含めて、国内外への発信は十分になされている。

もっともこれらの研究は、国際連携、学校連携、地域連携など時間と地域を超えた連携を行い

つつ、最終的には、本プロジェクトが一体となって様々な学問的貢献が可能になることを目指したものである。個々人は十分な研究業績をあげているとはいえ、今後はより具体的なテーマを設定した共同研究に着手することも必要かもしれない。

○研究成果の一覧

(1) 学会誌等（発表者名、テーマ名、学会誌名、巻号、年月日、ページ）

有元光彦「九州方言におけるテ形音韻現象の崩壊について」『言語研究』第158号、日本言語学会編、2020年12月、1-28

黒崎貴史・有元光彦「西日本方言話者の用いる「クナイ」について」『研究論叢(山口大学教育学部)』第70巻、2021年1月、273-282

有元光彦・Ta Thanh Huyen、「なぜ沈黙のない自然会話ができるのか？—予備的考察—」『研究論叢(山口大学教育学部)』第70巻、2021年1月、283-289

赤星冴・野村厚志・磯村知輝・北沢千里「山口大学教育学部附属光小学校における持続可能な海洋環境問題に取り組む拠点形成」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、50:2020年9月、115-123

石井由理「バリの大学生への質問紙調査に見るインドネシアの音楽」『山口大学教育学部研究論叢』70巻、2021年、101-108

王宇鵬・石井由理「中国の美術教育課程におけるグローバル化とローカル化」『山口大学教育学部研究論叢』70巻、2021年、109-115

高木啓、吉田茂孝、樋口裕介、北川剛司、熊井将太、山岸知幸「教育方法学テキストの比較分析—コンテンツとコンピテンシーとの関係」中国四国教育学会編『教育学研究紀要（CD-ROM版）』、第66巻

Toshiaki TAKAHASHI「A Pedagogical Grammar Perspective on the Selection Criteria of a Definite Article in Countable and Uncountable Noun Contexts」大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要（18）、2021年3月、37-52

櫻井健一郎、石川美佐子、桑原里美、後藤大雄、高橋俊章、松谷緑、藤本幸伸、猫田和明「外国語のコミュニケーションにおける「見方・考え方」「論理性」を育てる授業と効果の検証について」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要（50）2020年9月、35-44

松岡勝彦ほか（2020）「「対象と向き合う姿」から捉えた幼稚園カリキュラムの実践と検証」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要、50、87-96.

植田隆博・松岡勝彦（2020）「A S D成人における業務遂行中に不適切発言をする行動の改善—就労継続支援B型事業所職員への行動コンサルテーションの実践を通して—」自閉症スペクトラム研究、17（2）、41-49.

Mayo Oyama, Saeri Yamamoto (2020) Pluralistic Approaches for Japanese University Students Preparing to Study Abroad, in European Journal of Language Policy, (12), 29-53

(2) 口頭発表（発表者名、テーマ名、学会等名、年月日）

榎谷昂毅、山中 明、北沢千里「ウニ類幼生における成体原基形成方向の維持について」日本動

- 物学会第91回大会 2020年9月4日（オンライン開催）
前田瑞生、大野瑠璃、北沢千里、山中 明「ムラサキシジミ成虫の季節型発現の調節機構について」日本動物学会第91回大会 2020年9月4日（オンライン開催）
清永晋平、馬場彩樺、前田瑞生、北沢千里、山中 明「休眠性の異なる蛹から羽化したジャコウアゲハ成虫の鱗粉形状の比較解析」西日本応用動物昆虫研究会・中国地方昆虫学会 令和2年度合同例会 2020年9月25日
上野翔也、高橋洋平、北沢千里、山中 明「ナガサキアゲハの蛹体色の発現調節機構に関する知見」日本農芸化学会中国四国支部第58回講演会（例会）2021年1月23日（香川大学農学部 オンライン開催）
高木啓、吉田茂孝、樋口裕介、北川剛司、熊井将太、山岸知幸「教育方法学テキストの比較分析—コンテンツとコンピテンシーとの関係」中国四国教育学会第72回大会、2020年11月

(3) 出版物（著者名、書名、出版物名、年月日、ページ）

- Ishii, Yuri (2020) “The Transition from Internationalization to Globalization: Japanese Curriculum Reforms in the Twenty-first Century” in Marco Jutila (ed.) Education Curriculum Development: Perspectives, challenges and future directions, NOVA Science Publishers: New York, pp. 61-88.
熊井将太「授業の成立にとって学級とは何か」深澤広明、吉田成章編『学習集団づくりが育てる「学びに向かう力」』溪水社、2020
熊井将太「学習の個別化時代における学級授業の課題」日本教育方法学会編『公教育としての学校を問い直す—コロナ禍のオンライン教育・貧困・関係性をまなごす—』図書文化、2020
石井英真、熊井将太、川地亜弥子、藤本和久、赤木和重、渡辺貴裕、亘理陽一、木村拓也、杉田浩崇、山下晃一『流行に踊る日本の教育』東洋館出版社、2021年
吉田伸之・森下徹『全体史へ—山口啓二の仕事』山川出版社、2021年5月

○プロジェクト名

東アジアを中心とする世界経済社会に対する感染症問題の影響

○研究組織

研究代表者：古賀大介・浜島清史

研究分担者：アケミク・アリ、朝水宗彦、石龍潭、角田由佳、仲間瑞樹、山本勝也、横田尚俊、渡邊幹雄

研究協力者：なし

○研究の概要と結果

本グループでは、東アジア地域はもちろんのことに世界的に甚大な影響を与えているコロナウイルス感染症を念頭に置きつつ、「東アジアを中心とする世界経済社会に対する感染症問題の影響」というタイトルでのプロジェクトを組むことにした。本プロジェクトは、本グループが取り

組んできた「東アジアにおける経済社会の転換」プロジェクトの継承的發展をめざす形で、新たに、喫緊性を有する社会科学的問題にチャレンジするものである。

プロジェクトメンバーは、東アジアのみならず中東・欧米地域を含む広範な地理的領域を研究対象地域とし、また、経済学、経済史学、政治学、観光政策学、法学、開発経済学、社会政策、医療経済学、社会学などを専門とする者で構成されており、上記プロジェクトにおいて、それぞれの専門領域の特性を生かしながら数多くの業績を上げてきた、学際性豊かなメンバーである。

本プロジェクトでは、このような学際性を生かしつつ、各構成メンバーが、それぞれの専門とする領域から、プロジェクト課題を念頭においた研究に取り組むことを基本とし、「感染症問題の社会経済に対する影響」の諸相・諸課題、特徴、また課題解決に資する数多くの知見を提起することを第一の目標としてきた。また、同時に「改革マネージメント経費の趣旨」を踏まえつつ、科学研究費補助金獲得や国際共同研究を念頭においたプロジェクト運営を目指してきた。

尚、本プロジェクトは事実上、新規プロジェクトであることや、また感染症対策から生じる資料調査・研究発表等の制約等に鑑みて、多くの研究業績を上げることが難しい。こうした状況を踏まえ、本格的な研究業績を輩出するための準備期間と位置づけ、定量的にやや抑えた現実的な目標値を設定している。また、研究成果の範囲に関しても、プロジェクトテーマとの関連性を有する研究、同テーマを意識した研究等幅広くその対象とする。

○研究成果の一覧

(1) 学会誌等（発表者名、テーマ名、学会誌名、巻号、年月日、ページ）

K. Ali Akkemik (2020), "The Impact of Energy Price Deregulation on Prices in China: A Structural Path Analysis", 『東アジア研究』, vol. 18, March 2020, pp. 247-268 (Li Jiaと共著、査読付き)

K. Ali Akkemik (2020), "The Textile and Clothing Industrialization Cycle", Marmara University Journal of Economic and Administrative Sciences, vol. 41, no. 1, June 2019, pp. 256-277 (Murat A. Yülek, Kaoru Natsuda, Mete Han Yağmurと共著、査読付き)

K. Ali Akkemik (2019) "Growth Slow-Down in China: An Intertemporal Dynamic CGE Analysis" 『山口経済学雑誌』 68巻, 5号, 1-18頁。

K. Ali Akkemik (2019) "The Impact of a Failed Coup d'État on Happiness, Life Satisfaction, and Trust: The Case of the Plot in Turkey on July 15, 2016", Asian Growth Institute (AGI) Working Paper No. 2019-10; Kobe University RIEB Discussion Paper No. DP2019-22; Osaka University ISER Discussion Paper No. 1067 (Gerçek Çiçek, Charles Yuji Horioka, Yoko Niimiと共著)

朝水宗彦、リシャラテ・アビリム (2019) 「民泊新法下の伝統的な農家民泊」 『山口経済学雑誌』 68巻1-2号、39-54頁。

石龍潭 (2019) 「信息公开与“权利滥用”」 中国人民大学書報資料センター 『憲法学、行政法学』 第3期、96-109頁。

石龍潭 (2019) 「中国における「検察公益訴訟」」 『東アジア研究』 18号、317-333頁。

角田由佳 「看護の生産性と看護師の生産性（看護×経済学 経済学で読み解く看護サービスと医

- 療政策 連載第4回)』『看護管理』29巻4号、370-374頁。
- 角田由佳「看護師の技能評価を難しくする診療報酬制度の仕組み」(看護×経済学 経済学で読み解く看護サービスと医療政策 連載第5回)』『看護管理』29巻5号、468-472頁。
- 角田由佳「看護師の労働条件の違い：介護保険関連分野を中心として」(看護×経済学 経済学で読み解く看護サービスと医療政策 連載第6回)』『看護管理』29巻6号、542-547頁。
- 角田由佳「看護補助者や薬剤師との業務分担の実態：独自調査から見てきた現状と課題」(看護×経済学 経済学で読み解く看護サービスと医療政策 連載第7回)』『看護管理』29巻7号 658-663頁。
- 角田由佳「加算の取得状況から見た業務分担の違い：独自調査から見てきた現状と課題・2」(看護×経済学 経済学で読み解く看護サービスと医療政策 連載第8回)』『看護管理』29巻8号、774-778頁。
- 角田由佳「看護師のワーク・ライフ・バランスと生産性」(看護×経済学 経済学で読み解く看護サービスと医療政策 連載第9回)』『看護管理』29巻9号、848-853頁。
- 角田由佳「よりよい看護のために：看護管理者の役割とは」(看護×経済学 経済学で読み解く看護サービスと医療政策 連載第10回)』『看護管理』29巻10号、948-954頁。
- 山本勝也、東海林麗香、服部麻理子 (2019)「公共サービスをめぐる問題に関する考察」『山口経済学雑誌』68巻6号、91-129頁。
- 浜島清史 (2019)「玄田有史編 (2017)『人手不足なのになぜ賃金が上がらないのか』慶応義塾大学出版会。」『山口経済学雑誌』第68巻第3号、2019年11月、129-140頁。

(2) 学会報告 (発表者名、テーマ名、学会等名、年月日)

- K. Ali Akkemik (2019), "Industrial Policies in China and "Made in China 2025 Strategy" Smart Economic Planning" and Industrial Policy Conference, Ankara, Turkey, October 15, 2019.
- K. Ali Akkemik (2019), "The Impact of Trust on Happiness: A Cross-Country Analysis" 国際開発学会第20回春季大会、陸前高田、2019年6月13日 (Gerçek Çiçek, Charles Yuji Horioka, Yoko Niimiと共著)。
- K. Ali Akkemik (2019), "Industrial Policies in China" Kadir Has University, Istanbul, Turkey, October 18, 2019.
- K. Ali Akkemik (2019), "Economic and Social History of Japan, Prewar Period" Ankara Social Sciences University, Ankara, Turkey, October 16, 2019.
- Munehiko Asamizu (2020), Tatsuru Nishio, Denes Perlaky, Xu Shaochen 'Globalization of Local Tourism in Yamaguchi Prefecture, Japan', 'Critical Tourism Studies Asia Pacific', Feb. 18th, 2020, Wakayama University.
- 朝水宗彦、郭淑娟 (2019)「地方におけるインバウンド観光の成長とコト消費の可能性」『日本国際観光学会 第23回全国大会』2019年10月19日 (桜美林大学)。
- 横田尚俊 (2019)「震災復興まちづくりとポスト復興期における都市コミュニティ」、第48回山口地域社会学会研究例会、2019年11月2日 (会場：山口大学)。
- 横田尚俊 (2019)「復興まちづくりからみた都市コミュニティと市民社会」、日本都市社会学会第

37回大会シンポジウム、2019年9月5日（会場：東洋大学）。

(3) 出版物（著者名、書名、出版物名、年月日、ページ）

K. Ali Akkemik (2019) “Çin-ABD Ticaret Savaşları Gölgesinde Çin Sanayi ve Teknoloji Politikaları” [China’s Industry and Trade Policies in Light of China-US Trade Wars]. In: Caner Bakır and Mustafa Yağcı (eds.), Çin Bilmecesi: Çin’in Ekonomik Yükselişi, Uluslararası İlişkilerde Dönüşüm ve Türkiye, İstanbul: Koç Üniversitesi Yayınları, Dec 2019, pp.77-101 (Burcu Menteşoğlu Tuncerと共著)

石龍潭 (2019) 『判例フォーカス行政法』、三省堂、110-117,162-179頁。

仲間瑞樹 (2019) 「政府の役割とは何か？－バングラデシュの事例をもとにして」豊嘉哲編著『リレー講義 アジア共同体の可能性』芦書房 第6章 196-218頁。

仲間瑞樹 (2019) 「2 政府と市場の役割」29-66頁「3 公共財の理論」67-94頁「9 国債と年金」207-231頁「10 人口の高齢化と少子化」232-253頁「11 社会資本と人的資本」254-273頁 本間正明・岩本康志著者代表『経済学教室 8 財政論』培風館。

K. Ali Akkemik (2019), ‘Japonya’nın İktisadi ve Sosyal Tarihi Cilt 1: Savaş Öncesi Dönem (~1945)’ [Economic and Social History of Japan vol 1: Pre-war Period (~1945)]. İstanbul Bilgi University Press, İstanbul, June 2019 .

朝水宗彦 (2019) 『観光客・留学生・地球規模の労働者』嵯峨野書院。

(4) 科研申請・採択

申請：アケミク・アリ、石龍潭、古賀大介、仲間瑞樹、角田由佳、山本勝也、横田尚俊

新規採択：なし

継続：古賀大介、角田由佳、横田尚俊

○プロジェクト名

東アジアにおける社会、経済と企業経営

○研究組織

研究代表者：内田恭彦

研究分担者：城下賢吾、李海峰、立山紘毅、有村貞則、豊嘉哲、山本周吾

研究協力者：なし

○研究の概要と結果

東アジアにおける社会、経済と企業経営に関し、以下の研究を進めた。

有村は障害者効用に関する日中の比較と考察を行った。内田は日本企業の人事異動の学習メカニズムについて認知学習理論を用いて実証的に明らかにし、従来の理論的説明の問題点を指摘し、新たな説明を付与した。城下は退職後に長生きリスクがあるかを日本のデータを用いて検証した。検証結果によると願気リスクを抑えることができることが分かった。山本はグローバル流動性に

関する以下の2点の研究成果を出した。1点目は、2008年の世界金融危機前後の国際資本移動がネットワーク効果によって、増幅したことを実証的に明らかにし、またシミュレーション分析をおこなない、国際金融センターの中心国である米国が果たす役割を定量的に評価したことである。2点目は、世界金融危機以降のグローバル流動性、すなわち、“The Second Phase of Global Liquidity”が資本規制の強い中国のシャドバンキングに及ぼす影響について定量的に評価したことである。豊はEUのコミュニティ主導型地域開発政策を通じた農村開発の研究を行った。農村人口維持に関する実証研究を実施中である。李(Li)は中国の炭素市場における価格変動、中国の中小企業の所有とイノベーションおよび持続的発展の関係、および世帯負債、負債比率と消費の関係について中国をフィールドとして研究を進めた。

○研究成果の一覧

(1) 学会誌等(発表者名、テーマ名、学会誌名、巻号、年月日、ページ)

有村貞則「中国の障害者雇用法に関する一考察—日本の法律との比較を中心に—」『山口経済学雑誌』第69巻第6号, 2020, 年371-404頁。

内田恭彦「日本企業のキャリア・システムにおける学習メカニズム—大手企業役員の経営幹部候補(部長職)時代までの認知学習—」『日本労務学会誌』21巻1号、2020年 21-36頁。

Kengo Shiroshita, Makoto Kinoshita, 2021, “Withdrawal strategy in Japan”, Yamaguchi Economics Journal (Yamaguchi University), pp.1-13.

Yamamoto, Shugo, “Banking Network Multiplier Effects on Cross-Border Bank Inflows,” International Review of Economics and Finance, Volume 70, November 2020, Pages 493-507.

Cao Ming, Li Haifeng, “Price volatility in the carbon market in China”, Journal of Cleaner Production, Volume 255, 10 May 2020, 120-171.

Chen Fuzhong, Li Haifeng, “The Ownership, Innovation and Sustainable Development of Micro and Small Enterprises: Evidence of China” 山口大学東亜経済研究 第78巻 第1・2号(2020年10月)

(2) 口頭発表(発表者名、テーマ名、学会等名、年月日)

Li Haifeng, Zhang Wei, and Zhou Yuting, “Household Debt, Leverage Ratio and Consumption—Evidence from China”, アジア消費経済国際学会, 2020年9月12日

Chen Fuzhong, Li Haifeng, and Wei Huini, “The ownership, innovation and sustainable development of micro and small enterprise” アジア消費経済国際学会, 2020年9月12日

(3) 出版物(著者名、書名、出版物名、年月日、ページ)

豊嘉哲「農業」、坂井一成・八十田博人編著『よくわかるEU政治』、ミネルヴァ書房、2020年4月30日、82-83頁。